

認知対象を表わす不定詞表現と節表現

山本 香理

0. はじめに

ある事態を **Q** とし, **Q** を認知するという事態を **P** とする。発話者は **Q** を不定詞表現または節表現を用いて表すことがある。

(1) a. **Je vois les dames se lever de table.**

b. **Je vois que les dames se lèvent de table.** (Willems, 1983 : 149)

(2) a. **J'entends Paul jouer de la guitare.**

b. **J'entends que Paul joue de la guitare.** (Leeman, 2002 : 111)

本稿の目的は, **voir** と **entendre** の直接目的補語としての不定詞表現と節表現の間の選択メカニズムを明らかにすることである⁽¹⁾。

以下では, 使用実態の観察と面接調査にもとづいて⁽²⁾, まず意味レベルにおける選択メカニズムを, 次に談話レベルにおける選択メカニズムを考える。従来, 両形式の間の選択は, **Q** を知覚対象として提示するか認識対象として提示するかの区別に対応すると説明されるのが通例であった。本稿ではさらに, 1で先行研究が十分に検討していない要因について考察し, より詳細な意味レベルの両形式の選択メカニズムを検討する。実は, 山本(2008)で指摘したように, 両形式の選択の背景には相手に対する何らかの働きかけの意図が潜んでいることがある。そこで, 2では両形式の選択メカニズムの解明には談話レベルの分析も不可欠であることを示す。

1. 意味レベルにおける選択メカニズム

先行研究の記述や実例の観察から、Q を知覚の対象とし、その Q の知覚の有無を聞き手に提示しようとする場合に不定詞表現を用いて発話を構成する。以下に挙げる例では視覚や聴覚によって Q を捉えたこと、または捉えていないことを述べている。

- (3) a. Ah, tiens, je le **vois** passer sur le quai de la gare.
 b. Est-ce que Patrick pleurait? Non. Je n'**ai** jamais **vu** Patrick pleurer. (P. Ferran, 1994, *Petits Arrangements avec les morts*)
- (4) a. Hier, j'**ai entendu** Luc rentrer.
 b. (他の人と話していて相手 (Lisa) がやって来るのに気付かなかったことを述べるのに)
 Bonjour, Lisa, je ne vous **ai pas entendue** arriver. (G. Musso, 2004, *Et après...*)

一方、思考を経て Q を捉え、その Q の認識があることを提示しようとする場合は節表現を用いて発話を構成する。(5) は外観・徴候・雰囲気などに基づいて Q を捉え、(6) は発話者以外の主体の発言やその声の調子に基づいて Q を捉えている。そしてその Q の認識があることを述べている。

- (5) a. (作家である相手がメモを取っているのに気付いて)
 Je **vois** que tu t'es remis à écrire. (C. Vicent, 1990, *La Discreète*)
 b. (朝寝坊して身支度する暇もなく学校にやってきた生徒に対し教師が)
 Je **vois** que vous n'avez même pas pris le temps de vous coiffer.
- (6) a. Au milieu du charabia qu'elle me déversait dans l'oreille, j'**ai**

entendu qu'elle me disait que notre ancien quartier avait beaucoup changé (. . .). (*Le Monde*, 18/8/2003)

- b. (. . .) par la voix de son secrétaire, Jean-Pierre Moreau, on **entend** bien qu'elle ne veut pas se battre sur les mêmes critères que les militants syndicaux. (*Le Monde*, 14/6/2000)

不定詞表現を用いる場合は Q の知覚の有無を提示することから、P と Q の時間関係は同時であり、Q は知覚で捉えられるタイプの事態に限られると従来指摘されてきた。そうした制約の他に Q の構成要素に関しても制約が認められるようである。1. 1. では不定詞表現を用いる場合の Q の構成要素に関する制約を明らかにし、その要因を検討する。ところで、従来の研究では不定詞表現を中心に制約が指摘されてきたが、節表現に関してもいくつか制約が認められるようである。そこで 1. 2. では節表現を用いる場合に課される制約について論じた研究を概観し、その制約の要因を検討する。

1. 1. 不定詞表現

不定詞表現を用いる場合は、Q の知覚の有無を提示することが発話の主眼である。そのことから、Q を思考を経て捉えたことを示す要素を含む場合は、不定詞表現を用いた発話は不自然になる。

そうした要素として、以前の事態との対照を示す表現がある。

例えば、曾我 (1997) は *maintenant* を挙げている。*maintenant* は「(それ以前とちがって) いまや」という先行事情を喚起することから、*maintenant* を示すときは Q を視覚のみによって捉えたことを述べるのではない。(7) で話題にしている Q は目の前で展開しているはずだが、実際には以前の事態との対照から Q を捉え、その認識があることを述べており、節表現が適当である。

(7) J'ai vu **Cécile manger maintenant de la viande / que Cécile mange*

maintenant de la viande. Elle n'est donc plus végétarienne. (曾我 1997: 126)

さらに次に挙げる *toujours autant* についても同様のことが言える。(8 a) の Q「君がそんなにタバコを吸うこと」は目の前で展開している。その Q の知覚があることを伝える際に不定詞表現を用いて発話を構成することができる。ところが、(8 b) で話題にしている「相変わらず君がそんなにタバコを吸うこと」を不定詞表現で表すことは不自然である。(8 c) のように Q を節表現で表せば自然な発話になる。それは、相手がタバコを吸っている現場の知覚だけでは Q を捉えることができないからである。*toujours autant* を示すときは、発話者は以前のある事態との対照を行う。つまり、現在相手がタバコを吸っている現場の目撃に加え、相手が何本もタバコを吸っていたという以前の事態との対照を経て「相変わらず君がそんなにタバコを吸うこと」という事態を捉えることができる。

- (8) a. *Quand je te vois fumer comme ça, je m'inquiète, c'est normal, non?*
 b. ? *Quand je te vois fumer toujours autant, je m'inquiète, c'est normal, non?*
 c. *Quand je vois que tu fumes toujours autant, je m'inquiète, c'est normal, non?*

以上の表現の他に、Q が判断の根拠を示す表現を含む場合は不定詞表現を用いた発話は不自然になる。また、判断の根拠を問うような疑問文の中で不定詞表現を用いた発話を構成することは不適切である。

- (9) a. *J'ai vu (*à son air) Marie se disputer avec son fils.*
 b. *J'ai vu à son air que Marie s'est disputée avec son fils.* (Labelle,

1996 : 85)

(10) a. **Je vois Paul arriver.**

– ***À quoi vois-tu Paul arriver?**

b. **Je vois que Paul arrive.**

– **À quoi vois-tu que Paul arrive?** (Leeman, 2002 : 103)

1. 2. 節表現

まず **voir** の節表現の制約について論じた研究として、曾我 (1997) が挙げられる。この論考によると、次の例で話題にしている「ウェイターが椅子を片付けること」は喫茶店につきもののごく平凡な事態であり、**Q** を「思考によって把握するようなことは考えにくい」ために節表現の発話は不適切とされると指摘している。

(11) **Tous les soirs je passe devant le café à la même heure et je vois le garçon ranger les chaises / ?? que le garçon range les chaises.** (曾我 1997 : 125)

entendre に関しては、**Q** を知覚の対象として提示する場合は、節表現は避けるべきである、またはその使用が限られていると指摘されることがある⁽³⁾。しかしその要因に触れている研究は、著者の知る限り、**Franckel et Lebaud (1990)** (以下、**F & L**) と **Dupas (1997)** のみである。

これらの論考では、**entendre** のアスペクトの観点からその要因を説明している。**F&L** は、**entendre** を **audire**, **comprendre**, **intendere** の三つの用法に分類し、**audire** の場合に節表現を用いて **Q** を表わすことが難しいと指摘している。

F & L は、**V que Q** という形式の発話は **Q** が既にイメージとして構築されているもの **préconstruit** であると述べている。ここでの **V** は **Q** の存在または生起を示すのではなく、既構築の **Q** に意味づけをする。例えば **Je ne m'é-**

tonne pas que Luc soit venu という発話は、既構築の Q 《Luc est venu》について、non-étonnement という意味づけを行っているのである。

そして、J'entends que Q においても、Q の存在は je によって既に構築されているものである。しかし、audire としての entendre は Q の知覚的不在から存在への移行を示す起動的価値 valeur inchoative を持つため、その対象の Q が既構築であることを示す que Q と共に用いることは難しい。しかし、そうした対立は、Q が既構築である文脈では回避することができると指摘している⁽⁴⁾。例えば (12) のように習慣的な解釈が与えられる文脈においては節表現の使用が可能である。

(12) Dès que j'**entends** que *Pierre vient*, je referme la trappe pour qu'il ne remarque rien.

そして、Dupas は voir が節表現を伴う場合も同様に、Q が既構築であるという文脈では節表現を用いて発話を構築することができると指摘している。例えば、タクシーを待っている場面において、タクシーがやって来るという Q の生起を予期している文脈では、節表現を用いることが可能であると述べている。

(13) Je **vois** qu'un taxi arrive. (Dupas 1997 : 110)

1. 3. まとめと問題点

以上、各形式を選択する場合に課される制約を考察し、以下の点を確認した：

- A. 不定詞表現を用いて発話を構成する場合は、Q の知覚の有無を提示することが発話の主眼である。そのことから、Q が以前の事態との対照を示す表現や判断の根拠を示す表現を含む場合は不定詞表現で発話を構成することは出来ない。

B. 節表現を用いて発話を構成する場合は、Q の認識があることを提示する。そのことから、「思考によって把握するようなことは考えにくい」事態について言及する場合や *voir* と *entendre* のもつアスペクトの要因から節表現の使用が不自然になることがある。

ところで、次に挙げる例で話題にしている「君が二枚お皿を並べること」や「私が *Monsieur* . . . と話すこと」、「私が笛を吹くこと」は何らかの思考に基づき捉えたものとして提示することとは馴染まない事態であると考えられる。また、その文脈からは Q が既構築であることは読み取ることができない。

(14) *Je vois que tu mets deux assiettes. Tu veux que je mange avec toi?*

(G. Montforez, 1958, *Les enfants du marais*)

(15) (*Sévrine* は招待客と話をしている。そこに女中が掃除をしに部屋へ入ってくる。そこで *Sévrine* は彼女に向かって)

Qu'est-ce que vous faites là, vous voyez que je parle à Monsieur. . .

(F. Truffaut, 1973, *La Nuit américaine*)

(16) (警察官が停車するように笛を吹くが、車は走り去ってしまう。そこで、警察官はその車を捕まえて)

Vous n'avez pas entendu que je sifflais, non?

以上の例における節表現の選択の要因を明らかにするためには、意味レベルの考察だけでは不十分であると考えられる。コミュニケーション場面では、発話者が Q についての評価を聞き手にどう提示するかに応じて両形式を使い分けていることが確認できる。そうした談話レベルの考察は従来の研究で十分になされていない。そこで 2. では談話レベルに着目し、両形式の選択メカニズムを考察する。

2. 談話レベルにおける選択メカニズム

2. 1. Q の事実性についての評価

Q の事実性 *facticité* について発話者または発話者以外の主体がどのように評価しているかを示すために不定詞表現と節表現を使い分けることがある。例えば、Kreutz (1998) や曾我 (1995, 1997, 2005) は Q の事実性について中立な態度 *présuppositionnellement neutre* で伝えるときは不定詞表現を選択し、事実として提示しようとするときは節表現を選択すると指摘している⁽⁵⁾。

結論を先取りして述べると、*voir* と *entendre* に関してもこの指摘が適用できそうである。つまり、原則として不定詞表現を用いるが、Q を事実として、または事実性が高いものとして評価していることを聞き手に提示する場合は節表現を選択する。以下では例を挙げながら、この論拠の妥当性を検証していく。

2. 1. 1. 認知主体が発話者である場合

次の (17) は同じ Q 「人々が火事だと叫ぶこと」について言及するために、不定詞表現と節表現の使い分けが認められる興味深い例である。まず Q の知覚を夢の中の出来事として述べ、Q を事実として提示しない前半部では不定詞表現を用いている。一方、発話者が目覚め、Q を認識し事実として提示する後半部では節表現を用いている。

(17) *Je rêve (que) j'entends crier au feu ; je me réveille et j'entends que l'on crie au feu.* (Alain cité par Pougeoise, 1998 : 219)

このような現実世界に属する Q だけでなく、発話者は、主観世界に属する Q について述べるときにも、つまり、Q を自分の目に浮かんだものとして述べるときにも、不定詞表現を用いる。たとえば、次の (18), (19) のような

ものが、その場合の発話の例である。Qである「長期にわたってプレーをすること」と「試合に勝つこと」はこれからのこととして展望している事態だから、不定詞表現に対応する節表現では現在形ではなく〈aller+不定詞〉を用いるはずだが、インフォーマントは不適切と判定する。

(18) (L'interview avec Pete Sampras : joueur de tennis)

- Avez-vous envisagé votre propre retraite : à vingt-huit ans, vous commencez à faire partie des "vieux" du circuit ?
- a. Vingt-huit ans, ce n'est pas vieux! Je *me vois jouer encore longtemps*.
- b. ?? Vingt-huit ans, ce n'est pas vieux! Je **vois que je vais jouer encore longtemps**.

Stefan Edberg ou Boris Becker avaient la trentaine quand ils ont arrêté. Avec mon jeu, je peux encore faire quatre ou cinq solides saisons. (*Le Monde*, 29/5/2000)

(19) (L'interview avec Zinedine Zidane : footballeur)

Je ne vois pas comment nous pourrions manquer notre Mondial avec les joueurs extraordinaires dont nous disposons.

- a. Dans ma tête, je *me vois lever les bras à l'issue des matches*.
- b. ?? Dans ma tête, je **vois que je vais lever les bras à l'issue des matches**. (*Le Monde*, 12/6/1998)

主観世界に属する Q の発話例を観察すると、発話者は Q の事実性が低いと評価している文脈において不定詞表現を選択する傾向が認められる。Q についてそうした評価を下しているのだから、発話者は Q を事実性の高いものとして提示する節表現を選択することはない。(20) では「離婚すること」について、“C'est quelque chose que j'arrive pas à envisager” と述べている。また (21) では「20 年後にコンサートを開いていること」について、前の文脈

で “il n'est pas exclu que j'arrête le métier tôt” と述べていることから、Q の事実性が低い評価していることが分かる。そして (22) に関しては、公人についてドラマを制作、または放映しないフランスのテレビ事情を考慮すると、Q の事実性が低いと評価していることが読み取れる。

- (20) Je *me* **vois** mal divorcer. C'est quelque chose que j'arrive pas à envisager . . . (P. Harel, 1997, *La Femme défendue*)
- (21) (. . .), mais il n'est pas exclu que j'arrête le métier tôt. Je ne sais pas pourquoi, mais je ne *me* **vois** pas donner encore des concerts dans vingt ans. (*Le Monde*, 20/8/2003)
- (22) Dans le système politico-médiatique français, impossible de **voir** TF 1 produire, et encore moins diffuser, une fiction sur les «amis de trente ans» Chirac et Balladur ou sur les coups tordus de Sarkozy dans son ascension vers l'Élysée. (*Libération*, 24/4/2007)

一方、Q の事実性が高いと評価している場合は節表現で発話を構成する。(23) では発話者が Grozny が復興している現場を確認していること、(24) では発話者がまさに死に瀕していることを実感していることから、発話者は Q の事実性が高いと評価している。

- (23) Et ça fait plaisir de voir comment notre ville reprend forme. Grozny était tellement effrayante! Aujourd'hui, on **voit** qu'enfin notre vie va s'améliorer. (*Libération*, 26/4/2007)
- (24) Embrasse-moi tout de suite avant que je sois tout à fait morte! Tu **vois** bien que je vais mourir! (J. Anouilh, 1952, *La Valse des Toreadors*)

2. 1. 2. 認知主体が第三者である場合

認知主体が第三者である場合に関しても、Q の事実性についての評価を示すために不定詞表現と節表現を使い分けると指摘されることがある⁽⁶⁾。不定詞表現を用いる場合は Q の知覚や想起の有無を提示する。一方、節表現を用いる場合は第三者が Q を事実、または事実性の高いものとして認識していることを提示する。例えば、(25 a) は「ゴールまで首位を独走していること」という Q が M. Schumacher の目に浮かんでいると述べている。一方、(25 b) はその Q を M. Schumacher が事実性の高いものとして認識していることを伝える発話である。その場合、上で指摘したように、第三者は Q をこれからのこととして展望している。そこで不定詞表現に対応する節表現では現在形ではなく〈aller+不定詞〉を用いることになる。

- (25) a. Michael Schumacher *se voit déjà conduire sa monoplace en tête jusqu'à l'arrivée.*
 b. Michael Schumacher *voit déjà qu'il va conduire sa monoplace en tête jusqu'à l'arrivée.*

さらに、認知主体が第三者である場合にも、発話者の Q についての評価を示すことがある。例えば、Q が事実であるにも関わらず、第三者がその事実を認識していないことを伝える場合である。まず、不定詞表現を用いた (26 a) は想起があることを述べている例である。つまり、「彼女が一生 ZEP (教育優先地区) で働き続けること」という Q を認知主体である彼女の目には浮かんでいないことを述べている。一方、節表現を用いた (26 b) は、彼女が Q を事実として認識していないことを伝える発話である。例えば、ZEP の実情をよく知る発話者が、「彼女が一生 ZEP で働き続けること」が事実であるにも関わらず、その事実を彼女が認識していないことを述べる場面が考えられる。(27 b) も同様のことが言える。節表現を用いて「X と結婚すると一生不幸になること」が事実であるにも関わらず、その事実を彼女が認識していない

ことを述べている。

(26) a. Elle ne se **voit** pas *passer toute sa carrière en ZEP.*

«C'est un excellent établissement, mais je ne crois pas qu'il faille aller au-delà de dix ans. Sinon, on risque de baisser ses exigences et d'être trop imprégné par les douleurs sociales.

b. Elle ne **voit** pas *qu'elle va passer toute sa carrière en ZEP.* (*Le Monde*, 23/6/2003)

(27) Elle se marie avec X.

a. Elle ne se **voit** pas *être malheureuse toute sa vie.*

b. Elle ne **voit** pas *qu'elle va être malheureuse toute sa vie.*

2. 1. 3. まとめ

以上、Q の事実性をどう提示するかに応じて、両形式を使い分けることを見た。そして以下の点を確認した：

- A. 不定詞表現を用いて発話を構成する場合は、発話の主眼は Q の知覚または想起の有無を聞き手に伝えることである。そのとき、発話者は Q を事実、または事実性が高いものとして提示しようとはしない。
- B. 節表現を用いて発話を構成する場合、発話者は Q を事実、または事実性の高いものとして提示する。認知主体が第三者である場合に関しても、第三者が Q を事実、または事実性の高いものとして認識していることを伝えるときは節表現を用いる。さらに、Q が事実であるにも関わらず、その Q を第三者が事実として認識していないことを伝える場合にも節表現を用いて発話を構成する。

コミュニケーション場面では、さまざまな表現効果をねらって両形式を使い分けている。次にそれを見ていこう。

2.2. コミュニケーション上の目的の達成

発話者は聞き手に対する働きかけといったコミュニケーション上の目的の達成を意図して両形式を使い分けているようである。

節表現を選択する場合は **Q** を事実として提示することで、その **Q** が喚起する価値を発話者が認識している、または聞き手が認識しているはずのこととして述べる。それにより、発話者は聞き手にさまざまな行動を求めるのである。

例えば (28 a) では **Q** を知覚の対象として提示している。しかし、(28 b) は節表現を選択することで聞き手に何らかの行動を求めている。例えば、発話者と聞き手、そして Paul の間で口笛を出発の合図にしている場面を想像してみよう。(28 b) は「Paul が口笛を吹くこと」を事実として提示し、その **Q** が喚起する価値、つまり「Paul が出発の合図を送っていること」を認識していることを述べる。そうすることで、聞き手に出発することを促しているのである。

(28) a. **J'entends Paul siffler dans la pièce voisine.**

b. **J'entends que Paul siffle dans la pièce voisine.**

次の不定詞表現を用いた (29 b) は、「君がビー玉をとること」の知覚があったことを聞き手に示している。一方、(29 a) は、**Q** を事実として提示し、その **Q** が喚起する「ビー玉の窃盗」という価値を認識していることを述べている。それにより、ビー玉を盗っていないと言い張る聞き手に、ビー玉を返すよう迫っているのである。

(29) A: **Rends-moi mes billes!**

B: **Mais je les ai pas!**

A: a. **Si, j'ai vu que tu les as pris!**

b. **Si, je t'ai vu les prendre.** (H-G. Clouzot, 1955, *Les Diaboliques*)

次の (30)–(32) は、Q の喚起する価値を聞き手が認識しているはずのものとして述べることで、聞き手にさまざまな行動を求めている。(30 a) の「私が働くこと」は「邪魔をすべきではない状況」という価値を喚起し、それを聞き手が認識しているはずのこととして述べている。そうして聞き手に働いているのだから邪魔をしないよう求めている。(31 a) に関しても同様である。「私が *Monsieur* . . . と話すこと」は「邪魔をすべきではない状況」という価値を喚起し、その価値を聞き手が認識しているはずのこととして述べている。それにより、招待客と大切な話をしているのだから部屋から出て行くよう聞き手に求めている。(32 a) の「警察官である自分が笛を吹くこと」は「停車すべき」という価値を喚起し、その価値を認識しているはずのこととして述べることで、聞き手に反省を求めている。

(30) (仕事中に邪魔されて)

a. *Écoute, tu vois bien que je travaille!*

b. ?? *Écoute, tu me vois bien travailler!*

(31=15) (*Sévrine* は招待客と話をしている。そこに女中が掃除をしに部屋へ入ってくる。そこで *Sévrine* は彼女に向かって)

a. *Qu'est-ce que vous faites là, vous voyez que je parle à Monsieur . . .*

b. ?? *Qu'est-ce que vous faites là, vous me voyez parler à Monsieur . . .* (F. Truffaut, 1973, *La nuit américaine*)

(32=16) (警察官が停車するように笛を吹くが、車は走り去ってしまう。そこで、警察官はその車を捕まえて)

a. *Vous n'avez pas entendu que je sifflais, non?*

b. ?? *Vous ne m'avez pas entendu siffler, non?*

以上、節表現の選択する場合を中心に考察した。

不定詞表現に関してもコミュニケーション上の目的を達成するために選択す

ると考えられる。つまり、節表現の使用が予期される場面において不定詞表現を選択する場面があると推測できる。具体的には、不定詞表現を選択することで、ある事態を事実または事実性の高いものとして提示することを避け、聞き手に配慮していることを示すという場面があるはずである。そのことについては稿を改めて論じることにする。

3. おわりに

本稿では不定詞表現と節表現の選択メカニズムの解明には意味レベルだけでなく、談話レベルの分析も不可欠であることを示した。そして以下のことを確認した：

- A. 不定詞表現を用いて発話を構成する場合、発話者は Q の知覚または想起の有無を聞き手に伝えることに主眼がある。Q を事実、または事実性の高いものとして提示しない。
- B. 節表現を用いて発話を構成する場合、発話者は Q を事実、または事実性の高いものとして提示する。認知主体が発話者以外の第三者である場合に関しても、第三者が Q を事実、または事実性の高いものとして認識していることを伝えるときは節表現を用いる。さらに、Q が事実であるにも関わらず、第三者が事実として認識していないことを伝える場合にも節表現を用いて発話を構成する。そして、コミュニケーション場面では、Q が喚起する価値を発話者が認識している、または聞き手が認識しているはずであることと述べることで、聞き手に対してさまざまな行動を求めることがある。

注

- (1) 節表現内の叙法の選択については論じない。また、関係詞節を含む発話は考察の対象としない： *Je le vois qui travaille dans son jardin.* (Willems et al. 2000 : 10)

- (2) 映画のシナリオ (65 作品), 演劇の脚本 (14 作品), 小説 (84 作品), 新聞記事 *Le Monde, Libération* を使用。以下に挙げる発話例のなかで出典を示していないものは, インフォーマントの協力を得て作成したもの。a, b のように示す発話例の場合は a がオリジナル。インフォーマント調査には Olivier Birman 先生 (関西学院大学) と Georgette 川合先生 (甲南女子大学) にご協力いただき, 多くの示唆を得ることができた。
- (3) 例えば白水社ラールス仏和辞典に次のような記述が見られる:
「…するのが聞こえる」の意味で〈N-que+ind〉を用いるのはごく限られている。J'entends qu'on vient. 「人が来るのが聞こえる」は書きことばで古風な感じ。*J'entends que Pierre vient. とは言えない。J'entends qu'on parle de moi. 「どうやら私のことを話しているみたいですね」は, 話しことばで, 例えば部屋の外で話が聞こえたので, 中に入ってこう言える。(413)
この他に, 朝倉 (2002), セレリエ他 (1988) も参照のこと。
- (4) 発話者以外の主体が述べたものとして提示する文脈でも節表現が可能であると指摘している。
- (5) そのことから, Q 〈avoir mangé du chocolat – hier soir〉を不定詞表現を用いて表わした (1 a) は, その事実性を示す文脈 (1 b) と否定する文脈 (1 c) のどちらの文脈でも容認される。一方, Q を事実として提示する節表現を用いた場合は, (2 b) の Q の事実性を否定する文脈では容認されない。
- (1) a. Pol ne **se rappelle** pas (d') *avoir mangé du chocolat hier soir*.
b. Pol ne **se rappelle** pas (d') *avoir mangé du chocolat hier soir*. Il était tellement saoul qu'il en a mis partout sur le canapé.
c. Pol ne **se rappelle** pas (d') *avoir mangé du chocolat hier soir*. Ce n'est donc pas lui qui a pu laisser ces traces sur le canapé. (Kreutz 1998 : 145)
- (2) a. Pol ne **se rappelle** pas *qu'il a mangé du chocolat hier soir*.
b. ?? Pol ne **se rappelle** pas *qu'il a mangé du chocolat hier soir*. Ce n'est donc pas lui qui a pu laisser ces traces sur le canapé. (*ibid.*)
- この論考の他にも, 曾我 (1995, 1997, 2005) は主に croire や penser をはじめとする非叙実述語 *prédicatif non factif* を中心に両形式の選択メカニズムについて論じている。
- (6) Bayer (1986), Labelle (1996) は, Q を不定詞表現を用いて表わす場合は Q が現実であることは伝わらないが, 節表現を用いる場合は Q が事実であることが伝わると指摘している。また Willems (1983) は, 不定詞表現を選択する場合は, Q が可能 *possible*, または非事実 *non factif* であることが伝わると述べている。いずれの論考においても Q を事実性の高いものと評価する場合は, 節表現

を用いて発話を構成するという点は一致している。

- (1) a. Pierre **a vu** *une soucoupe volante atterrir dans son jardin.*
: n'implique pas une soucoupe volante a atterri dans son jardin.
- b. Pierre **a vu** *qu'une soucoupe volante a atteri dans son jardin.*
: implique une soucoupe volante a atteri dans son jardin. (Labelle, 1996 : 87)

主要参考文献

- BAYER, J. (1986) : "The role of event expression in grammar", *Studies in Language*, Vol. 10-1, pp. 1-52.
- DUPAS, C. (1997) : *Perception et langage : Etude linguistique du fonctionnement des verbes de perception auditive et visuelle en anglais et en français*, BIG 36, Petters.
- FRANCKEL, J-J. et LEBAUD, D. (1990) : *Les figures du sujet : à propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys.
- KREUTZ, P. (1998) : "Une typologie des prédicats factifs", *Le français moderne*, Vol. 66-2. pp. 141-181.
- LABELLE, M. (1996) : "Remarque sur les verbes de perception et la sous-catégorisation", *Recherches linguistiques de Vincennes* 25, 83-106
- LEEMAN, D. (2002) : *La phrase complexe : Les subordinations*, De Boeck. Duculot.
- LEMHAGEN, G. (1979) : *La concurrence entre l'infinitif et la subordonnée complétive introduite par que en français contemporain*, Univ. d'Uppsala.
- MILLER, P. et LOWREY, B. (2003) : "La complémentation des verbes de perception en français et en anglais" In *Essais sur la grammaire comparée du français et de l'anglais*, éd. P. Miller et A. Zribi-Hertz, pp. 131-188.
- POUGEOISE, M. (1998) : *Dictionnaire de grammaire et des difficultés grammaticales*, Armand Colin.
- WILLEMS, D. (1981) : *Syntaxe, lexicque et sémantique Les constructions verbales*, Univ. GENT.
- (1983) : "Regarde voir. Les verbes de perception visuelle et la complémentation verbale", in E. Roegiest et L. Tasmowski, *Verbe et phrase dans les langues romanes, Romanica Gandensia*, XX, pp. 147-158.
- WILLEMS, D *et al.* (2000) : "L'Attribut de l'objet et les verbes de perception", *Langue Française* 127, pp. 6-20.
- 朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』, 白水社.

セリエ, P. *et al.*: 『DSF フランス語法辞典: 使える基本単語 800』, 西村牧夫, フランソワーズ V. 尾上編訳, 白水社.

曾我祐典 (1992): 『フランス語における状況の表現法—構文・動詞叙法の選択—』, 白水社.

—— (1995): 「判断の表現 <penser+INF/que IND>」, フランス語学研究, 第 27 号, pp. 1-11.

—— (1997): 「認知動詞の意味と構文」, 『フランス語を探る フランス語学の諸問題 II』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, pp. 123-133.

—— (2005): 「他者の思考内容の現実性についての評価」, 『フランス語を探る フランス語学の諸問題 III』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, pp. 132-141.

山本香理 (2008): 「認知動詞の直接目的補語としての不定詞表現と節表現」, 『関西フランス語フランス文学』, 日本フランス語フランス文学会関西支部会, pp. 15-24.

——大学院文学研究科博士課程後期課程——